

“ Hacia la independencia de América Latina ”

Primera parte:

Situación social y corrientes de pensamiento en la Europa del siglo XVIII

La historia de la emancipación de las colonias españolas en América se inicia principalmente con los acontecimientos que transformaron la sociedad europea durante el siglo XVIII. Los efectos previos de estas transformaciones comenzaron a sentirse ya en el continente americano a mediados del siglo XVII, y tuvieron un desarrollo irreversible durante el siglo XVIII y comienzos del XIX. Detrás de los grandes acontecimientos sociales estuvieron las ideas que habían germinado dos siglos antes para convertirse en la corriente de pensamiento que predominó en la sociedad europea del siglo XVIII: la Ilustración.

Este trabajo es la primera parte del tema *Hacia la independencia de América Latina*, que intenta describir en primer lugar las grandes transformaciones sociales de Europa, en particular Francia e Inglaterra en el siglo XVIII, para llegar a destacar las ideas que provocaron los grandes cambios político sociales. La segunda sección de esta primera se centra en España, describiendo brevemente la situación político-social de la época y presenta a los personajes más destacados del pensamiento ilustrado.

La versión en japonés de este trabajo se debe a las notas tomadas en clase de la asignatura “Historia del Pensamiento Español e Hispanoamericano”, dictada en español. Debemos la redacción final a la labor de Sachiyo Murase y Akiko Takahara, quienes tomaron parte en ese curso. También colaboraron en la redacción y corrección final Sayaka Nakajima, de la Universidad Keio y Yuko Ueda de la Universidad Sophia. A ellas nuestro reconocimiento y cordial gratitud por su esfuerzo y dedicación.

「ラテンアメリカの独立へ」 - 第一部：18世紀、ヨーロッパの思想と歴史的背景 -

Bernardo P. ASTIGUETA, S. J.
B. アスティゲタ

はじめに

ラテンアメリカの独立を支えた、あるいは促した思想的背景とはどのようなものであろうか。本稿では当時のラテンアメリカに直接的な影響力をもったヨーロッパとスペインの思想について考察してみたい。具体的には18世紀のヨーロッパ、特にスペインの、歴史的背景とその時代に特徴的な啓蒙思想を取り上げることにする。次稿ではラテンアメリカの政治的な独立とその思想的背景について検討することにしたい。これらを通して、何が「独立」を可能にした条件であったのかを考えることができれば幸いである。

I . 18世紀のヨーロッパ

この文章全体の問題意識の対象は18世紀のヨーロッパだが、ヨーロッパという世界にとって18世紀とはどんな時代だったのだろうか。

18世紀には、その前の16世紀・17世紀と違い、例えばルネッサンスに見られるような偉大なる創造は生まれなかった。18世紀に訪れたのは“変化”である。その変化は社会・経済・政治そして宗教にまでも及ぶ大きなものであった。

それまでのヨーロッパでは多くの国で絶対王政が確立され、フランスとイギリスが主導的役割を演じていた。絶対王政は、王とそれを取り巻く特権階級であった貴族および聖職者から成り、王権はその存在の正当性を神から与えられることにより維持していた。つまり、王の権力は神から授けられたものとされ、人々の王への忠実とは神への忠実を意味し、王の権力は

絶対的なものとなっていた。そのため、教会の協力が王権には必要不可欠であった。この時代のヨーロッパにおいて、王権と教会とは常に大変密接な関係にあり、政治の問題と宗教の問題とは深く結び付き、切り離せないものであったのである。絶対王政の代表的な例としては、フランスのルイ14世が太陽王としてよく知られているが、彼のように、絶対王政下では国家とは王を意味し、王は国家そのものであった。

18世紀に開花した近代思想は、すでに17世紀にその基礎を確立していた。今日近代思想の父と呼ばれているフランスのデカルト（1596～1650）・イギリスのベーコン（1561～1626）の二人が、それぞれ17世紀に合理論と経験論を確立した。また自由、平等、博愛の三精神に表わされる概念、すなわち、私達は自由であり、平等であり、そして皆兄弟であるという考え方も、18世紀に先立ち、17世紀の終盤から存在していた。

こうした前世紀までの世界に、18世紀は多岐にわたる変化・発展をもたらしたのである。人口の増加に伴う社会変化や新大陸の発見がもたらした経済的成長、そこから引き起こされ得る政治的变化をこの時代のヨーロッパは経験した。そのような社会変化の中、本稿で後に取り上げる啓蒙思想が誕生し発展していった。そして絶対王政に対して疑問が投げかけられ始めることとなった。“なぜ王が存在するのか”というような問いが議論され、“私達は自由であり権利を有している”ということに人々は覚醒し、成長していった。それに伴い、教会の権力や組織のつながり方も変容し、教会と王権の結び付きも次第に弱いものとなっていった。

新しい思想と社会の変化とは互いに結び付いている。社会が大きく変動するときには、その変化に対応して新しい思想が生まれ、またその思想が社会に新たな変化をもたらし、またその変化した社会の中で新しい思想が模索され生み出されるというひとつの循環ともいえるべきプロセスが存在する。18世紀という時代は社会や経済の変化を受けて、17世紀までの理論や思想が発展し、実践に移され、社会に更なる変化をもたらした時代であった。後にそれはラテンアメリカの植民地独立につながるが、そのためにはヨーロッパではこのような思想の自由が達成される必要があった。啓蒙思

想とはヨーロッパ民衆を文化的、思想的な独立へ導いた思想である。

以上ここまでにおいて、18世紀ヨーロッパの有り様を概観した。続く章では、18世紀に実際にどのように社会が変わっていったのかを詳しく見ていきたい。

II . ヨーロッパを訪れた変化

1. 経済の発展

ヨーロッパを訪れた変化として、まず経済の発展を取り上げたい。15世紀末の新大陸の発見以来発展してきたヨーロッパ経済は、18世紀においても更なる飛躍を見せた。その要因を以下において探ってみようと思う。

ヨーロッパでは18世紀に人口が著しく増加した。これは公衆衛生など生活環境の改善と医療技術の発達によるペスト死亡者の減少など、死亡率の低下に起因するとともに、出生率の上昇もそれを手伝ったことによる。人口の増加は今でこそ貧困の一要素として扱われることが多いが、本来は発展に必要なものであり、ヨーロッパにおけるこの時代がそうであった。人口増加により、国内市場が拡大し、経済は活性化した。また都市の発展に伴い郊外の村落も次第に発展し、ブルジョアジーと呼ばれる中産階級が誕生した。彼らは土地を所有していなかったが、商業に従事し、都市と郊外の間を行き来し流通に携わり、財を築いていった。このブルジョアジーの成長は後の社会変革において重要な意味を帯びてくる。

また、農業面にも変化が見られた。新大陸からやってきた新しい農作物や、灌漑システムの向上により農業生産は増加し、人口増加に伴う需要の上昇もそれに拍車をかけた。生産が増加して余剰生産物が生まれるにしたがって、生産は生活のためのものから売買のためのものへとその性格を変化させた。

このような農業の発展を支えたのは自然科学の発達であった。自然科学の発達は、17・8世紀に展開していた自然に対する新しい概念をその拠り

所としている。それは、自然を一つの大きな機械システムのように捉え、その機械がどのように機能するのかを考えるというもので、機械が一定の法則に従って機能するように、自然にも法則が存在すると考えられた。つまり、それまでのように神との関係において自然の存在を考えるのではなく、科学的思考によってそれを達成しようとしたのである。こうして自然界の事柄を科学的研究により理解し、人間自らの手により自然に働きかけていくことが考えられ始めた。このような概念を基盤として研究され発達した自然科学は、農業の発展に貢献していった。

上述の自然科学の発達はまた、産業、工業の発展にも大いに貢献することになった。機械化の進行により生産が生活のためのものから売買のためのものへと移行するに伴い、工業も家族単位のものから工場制のものへと移っていったのである。この家内制手工業から工場制手工業、そして機械化された工場生産への移行は、経済への非常に大きなインパクトとなった。イギリスにおける産業革命は、そうしたインパクトに刺激された一つの重要な例として捉えることができる。

産業革命については、より詳しく述べてみる必要がある。産業革命という一つの大きな変化がもたらされるには、まずその背景となる概念の変化が存在する、と私達は考えるのであるが、ヴォルテール（1694～1778）が説明しているところによれば、それは機械的本能の勝利であるという。それまでは、神によりすべてが規定されていて、自然界にあるすべては変えることはできないものだという伝統的な概念が存在していた。しかし18世紀になると、人間はその手で自然に働きかけることができる、と考えられるようになった。自然界の法則の研究により、当時の人々は社会の発展は可能であると認識するようになったのである。またそのように、超自然的な神という存在により規定されていた世界が、人間の力により変化させていくことのできるものであると捉え直されたことにより、神への信仰と自然科学との間に溝が生まれ、後者は独立し始めた。このような新しい思想の“勝利”ともいふべき発展、人々がそういった思想に目覚めたことが、機械化を推し進める原動力になったというのである。また、競争の原理や、それらの思想・概念に基づく資本主義の発達も、推進力となった。結果、

蒸気機関や製鉄の技術を擁した工場が誕生し、産業革命という大きな社会的変化が世にもたらされた、ということができる。

産業の発展に加えて、財政・金融界もまた発展を見せた。アダム・スミス(1723～1790)は『諸国民の富(国富論)』を著したが、彼の理論は未だ近代経済学の土台として機能している。自由主義・資本主義の父としてたたえられている彼は、経済における自由競争の実現をうたった。

現代との関わりにおいて産業革命を考えると、私達が今日抱いている価値観について、この産業革命にまでさかのぼって考察してみることは、非常に興味深いことである。常に経済的、技術的に前進していかなばならないといった考え方や、発展や幸福についての価値観が、そういった“進歩”に置かれるようになったことが、産業革命を導いたと思われる。

2. 植民地拡大主義

植民地の様相とそれをめぐる各国の姿勢も変化を見せた。18世紀は、ヨーロッパ諸国による新大陸への支配と開発が最も顕著であった時代であるといえよう。

航海術の発達と船舶の増加とともに、ヨーロッパ植民地は拡大していた。産業革命によって生産が増加すると、各国は新しい市場を必要とし、それを求めて植民地拡大が望まれたのである。市場としての植民地という考え方は、新しいものだった。初期の植民地、すなわちスペイン植民地では、大陸中に都市が建設され、人々の征服が目指されたのに対し、この頃の植民地では、海岸に港が建設され、貿易拠点として利用された。人々の征服それ自体には興味が注がれなくなっていたのである。商品の取引、貿易ルートへの獲得など、新しく手に入れた市場を機能させるための活動が開始されていった。また植民地はヨーロッパへの一次産品の供給源としても重要であった。このような新しい植民地拡大の主導国となったのはイギリスであった。イギリスは当時、世界における全船舶数の三分の一を所有していたといわれる。

このような植民地主義の世界では、海上覇権というものが非常に重要な

意味を持ち得たのは想像に難くない。覇権国家は初期にはスペイン・ポルトガルやがてオランダへ、そしてこの時代にはイギリスへと移行していった。

また植民地の拡大に伴い、科学的探求とその伝播が活発になり、人々の視野も広がった。18世紀に生きた人々は、新しく出会った大陸やその人々について、気候風土や人種、宗教など、今まで知らなかったたくさんのものとの出会いを前に、新しい視野を開拓していった。世界には多様な人々や土地が存在し、様々な違いを持っていることを認識するようになったのである。そうした中では、植民地やヨーロッパの現状に対して時には疑問を持ち、高い理想を抱いた人々もいた。彼らは新しい視野・視点から自由・平等・博愛の三精神に表わされる人間性の諸問題について考察したのである。16世紀、かつてトマス・モア（1478～1535）が描いたユートピアは、人々が平等で、対等の権利を持ち、自由である世界として表わされ、それは実現しない理想境として捉えられていたものだったが、この世紀に、それは完全なユートピアではなく実現可能なものである、という風になんかの認識が変化していった。そのような認識の変化は、前に述べたように、超自然的なものに規定されていた人々の目が、人間の力をより自覚した楽天的なものへと変化したことにも裏付けられている。

3．社会・政治の変革

18世紀のヨーロッパの趨勢を、最後に政治、社会という側面から眺めてみようと思う。

18世紀までに確立していたヨーロッパでの主な政治体制は絶対王政である事は前に述べた。その一つの代表的なモデルとして、ここではフランスの例を扱うことにする。フランス絶対王政下での社会構造は三つの身分階層からなっていた。まず王とそれを取り囲む貴族階級の人々からなる第一身分、それと並んでもう一つは上級の聖職者からなる第二身分、そしてそれら二つの階層の下に位置していた平民の第三身分である。貴族階級と聖職者達は両身分ともに税金と兵役を免除されていた。16から18世紀に至るまでが、ヨーロッパにおいて戦争の時代であったことを考えてみれば、

これらの特権がいかに大きな意味を有していたかがわかる。また王は自らの権力を保つために聖職者の協力を必要としていたため、王権と教会とは離れがたい関係にあった。王権は絶対的であり、同時に教会の存在も絶対的であった。王権に対してだけでなく教会に対しても、原則的には任意であったものの、平民は十分の一税という形で金銭を支払っている。しかし18世紀、この絶対王政とその下の社会構造は、徐々に変化していくことになる。

変化の鍵となったのは第三身分に属する平民らであった。彼らの中でも特にブルジョアジーと呼ばれる人々がその担い手となっていった。ブルジョアジーとは、都市郊外の村落の住民に由来する言葉で、前に人口増加のところで述べた、郊外の発展により成長していった中産階級の人々の事である。平民の中でも、商工業を営んできたブルジョアジーは徐々に経済的な力をつけてきていた。彼らは小作や商人、銀行家などから、しばしば医者や弁護士、教職者といった専門職につくまでに成長した。しかしどんなに経済的な力を貯えようと、貴族階級に昇進する事は不可能であった。社会階層は血統的なもので、これを変えるにはその絶対的な社会構造そのものを変えなくてはならなかったからである。実際の力を持ちながら社会的・政治的にそれに見合った地位を得られない事に対し、ブルジョアジーは疑問を持ち始めた。彼らはもはや平民という枠の中にとどまることに満足できなくなっていた。そこには、先にも触れた自然科学の発展による働きかけがあった。それまでは、自然は不変なものであり、社会構造も不変なものであると考えられていたが、科学の発達により自然は可変的なものであると認識されるようになり、それに伴い社会構造も自分達の手によって変えていくことができるものであると、人々の意識が変化したのである。こうした意識状況の下、ブルジョアジーは社会改革に積極的に参加することができた。人が社会の中で政治的な影響力を獲得するまでには、まず始めに社会的にその存在を認められ、次に経済力を獲得し、そしてそこから政治的場面での発言力を得るという三つの段階を踏む。18世紀にブルジョアジーはその第二の段階、すなわち経済力をたくわえたという段階に至り、その次の段階、つまり政治への参加を求め始めていたのである。また彼らは、個人の権利や自由といったものにも目覚めていった。それらは18世紀

まで、平民には認められてこなかったものであった。しかしながらその一方で、ブルジョアジーの成長は、その他の平民との間に格差を生じていったのもまた事実である。始めのうちは、ブルジョアジーと農民などその他の平民は、社会構造を変えるために結びついていたが、ブルジョアジーの経済力が高まっていくとともに、次第に両者は離れ、その結びつきを弱めていったのである。農民やブルジョアジーに属さない下級商人らは、成長していくブルジョアジーとは対照的にますます社会の中での弱い立場にとどまり、経済力も弱小なままで、増税の増加にも苦しまなくてはならなかった。

以上述べてきたような社会的な変化に応じて、政治の世界も変化した。君主達は、第三身分の成長を前に、いつまでも太陽王の時代のようには絶対王政を維持できないことに気づき始めたのである。そこには議会や人民の協力・支持なしには国を統治できないという認識が生じていた。そこで出現したのが、啓蒙専制主義である。啓蒙専制主義の特徴は、以下五つの項目の実現を目指したことに見出せる。国民の幸福、政教分離、宗教的寛容、教育への関心、社会変革、の五つである。啓蒙専制君主達は、政治に啓蒙思想家達の意見を取り入れ、権威を民衆と分け合うという形を取った。これらの実践を試みた具体例としては、ロシアのエカチェリーナ2世、オーストリアのヨーゼフ2世、ブルボン朝スペインのカルロス3世、イギリスのジョージ1～3世が挙げられる。しかし啓蒙専制主義の政権は、啓蒙主義の実践だけではなく、自己の権威を確保するために官僚制の強化と常備軍の増強を行った。こうして官僚制を機能させるために国が多くの専門家を必要としたことと常備軍の維持には、多額の税収を必要としたという側面もあったことは否めない。

こうした社会構造に対する姿勢の変化、新しい政治体制が訪れ、人々の生活習慣にも様々な変化が見られた。衣服や住居などの文化や、女性のあり方、教育などに加え、宗教の社会に対するありかたもそれまでとは違ったものになった。科学が研究され発達し、社会に存在するすべてを宗教のみで説明することができなくなっていったため、科学と宗教とは別のものとして扱われるようになり、科学は宗教から次第に独立していった。

Ⅲ．18世紀における三つの大きな出来事

18世紀にはどのような変化が見られたのかを今まで見てきたが、ここで、それらの変化に象徴される18世紀に起きた、三つの大きな歴史的事件を見ていくことにする。

1．三大戦争

18世紀、ヨーロッパでは三つの大きな戦争があった。スペイン継承戦争、オーストリア継承戦争、七年戦争の三つである。スペイン継承戦争では、スペインはイベリア半島を除くヨーロッパのすべての領土を失い、その結果、オランダ・イギリスの海上での権威が強まることになった。フランスは、ブルボン家による王位継承をかりうじて実現したものの、戦争後の国力の疲弊と弱体化を招いた。オーストリア継承戦争及びそれに続く7年戦争は、ヨーロッパの政治地図を大きく変貌させ、プロシアが勢力を強め、イギリスもまた優位を確立し、海上覇権国家としてその名を轟かせた。

2．アメリカにおけるイギリス植民地の独立

アメリカにおけるイギリス植民地は、経済的繁栄を呈していた。これは、イギリス植民地の性格がより商業的利益の追求に向けたものであったことに由来すると思われる。スペイン植民地も、これら経済的に発達したイギリス植民地との交易を求めた。しかし経済的繁栄の反面、植民地では、本国であるイギリスに多額の税金を支払わねばならないなどの制約が存在していた。特に1773年、本国の制定した茶の貿易に関する法律は植民地の反発を招き、抵抗運動が起こった（ボストン茶会事件）。1776年には、フィラデルフィアにて独立宣言が発表され、1783年、パリ条約によりアメリカの独立戦争に終止符が打たれ、イギリスはアメリカ合衆国の独立を認めた。1787年には合衆国憲法が採択され、この憲法により州自治を認めた連邦制と、民主共和国家が現実のものとなる。アメリカ合衆国の独立は、次に見るフランス革命に、思想的・精神的に多大な影響を与えることになった。

3．フランス革命

三つのうちの最後は、フランス革命である。この第三身分による革命は、

アメリカ合衆国の独立から大きな影響を受けたが、アメリカのイギリス植民地は歴史の短い新しい社会であったのに対し、フランスでは、伝統的な旧体制（アンシャン・レジーム）が存在し、革命達成のためにはまずその社会体制を根元から覆さなくてはならなかったという社会背景があり、それはアメリカの独立とフランス革命との根本的な相違点である。

フランス革命について、三つの主たる要因をあげることができる。一つは、アメリカ合衆国の独立で、人々はこれにより、民主主義・共和制の実現が可能であるという例証を得た。この事は、革命を推進する人々にとってイデオロギー的に非常に重要な拠り所となった。もう一つは、イギリスにおいて立憲君主制が既に実現されていたことであった。そして最後に、人々が飢えに苦しみ、不満が蓄積していたことが挙げられる。適切な経済組織が欠如し、物資の不足が深刻であった上に、多くの戦争により国民は疲弊していた。そうした食糧の不足や重い税金に耐え兼ねていた人々の不満は増大し、いつの時代にもそうであるように、革命の原動力となっていたのである。

そのような背景のもとに1789年、ついに第三身分の人々による革命が起こった。革命の第一期は、1789～1793年にかけての穏健派の時代であった。第三身分が中心となって国民議会在が創設され、まず封建的特権が廃止された。そして人権宣言が採択され、と同時に三権分立が取り入れられた。続く第二期は、1793・4年のより急進的な時期で、立法議会在（国民議会在は立法議会在と改称）に代わって、1792年に発足していた国民公会在が機能していた。国民公会在の召集にあたっては、男子普通選挙制が実現された。この時期においては、ブルジョアジーの中でもより下層の人々がより急進的な変化を求めて革命を推進した。急進派であるジャコバン派により恐怖政治が敷かれ、国王ルイ16世を含め、多くの人々の血が流された。第三期（1794・5年）は、第二期の急進的な革命の反動の時期であった。恐怖政治を推進していた勢力打倒後、総裁政府が発足し、主導権は上層ブルジョアジーへと戻った。総裁政府は急進的ジャコバン派の流れを継ぐ右派と、比較的穏健なジロンド派に由来する左派との対立により不安定であった。1799年のナポレオンのクーデターに始まる第四期では、総裁政府が倒され、

代わって統領政府が樹立された。統領政府は政治的に成功を収め、1804年にはナポレオンが皇帝の座に就き、第一帝政へと移行した。

以上の様な三つの歴史的事件の経験を経て、ヨーロッパでは啓蒙思想が実践されることになったのである。

IV . 啓蒙思想の到来

それではここから、17世紀までに確立されていた近代思想の基礎の上に、特にイギリスおよびフランスでより顕著に発展し、18世紀のヨーロッパで開花することになった、啓蒙思想について述べていくことにする。

1 . 合理主義と近代思想の発生

啓蒙思想について述べる前に、その土台となった近代思想、合理主義について触れておきたい。前に述べたように、啓蒙主義の先駆けとなったのは17世紀に起こった合理主義であり、その理論を最初に確立したのが近代思想の父と呼ばれるデカルト（1596～1650）であった。デカルトは理性でのみ、真の知識を手に入れることができるのだと主張し、当時のカトリックの教義と対立した。その時代まで、幸福は伝統や道徳、あるいは社会の規範を守ることによって得られるものと考えられてきたが、合理主義においては、幸福を感じることでできる理性は自らの内側にあり、それら伝統などを守ることによってのみ幸福が得られるわけではないとしたのである。したがって、合理主義の世界においては、幸福とは何か、という問いに対する答えも、それまでのものとは異なったものになった。幸福は信仰によっていつか天国に行くことではなく、現世において達成されるべきものだと考えられるようになったのである。合理主義は、知識によって進歩、発展を遂げ、より良い生活を送ることこそが幸せなのではないか、と社会に対して疑問を投げかけた。人間は知識を得ることで進歩できるし、また進歩するべき存在である、と。つまり、それまでの神のみが物事を変化へ導く事ができるという考え方が覆されたのであった。

また、17～18世紀に起こった近代哲学・科学も、啓蒙思想とつながりを持ち、影響を与えている。ニュートン（1642～1727）はそれまでなされ

てきた物理学の研究を一つに体系化し、近代物理学の基礎を築いた。ジョン・ロック（1632～1704）は、あらゆる知識は経験によって裏付けられるべきと説き、一方で立法・行政・司法という三権分立の制度を政治の理想形態として打ち出した。モンテスキュー（1689～1755）は絶対王政を批判し、著書である『法の精神』の中で、ロックの思想を取り入れながら、イギリスの議会制を賛美した。

2．啓蒙思想

様々な社会変化や上記のような思想的変遷を経て、18世紀はヨーロッパの多くの国で、それまでの社会体制や、カトリックの上級聖職者だけが知識を備え、また知識を得る機会をさえも独占している、ということに反対する新たな考え方が現れた時代だった。社会の中で、ひとにぎりの人々のみが知識を独占し、一般の人々がそれを享受できるシステムが存在していなかった時代に、フランスなどでは、啓蒙思想家と呼ばれる哲学者らが、理性を用いて大衆に知識を与えよう、つまり啓蒙化しようと立ち上がった。歴史の主角は、君主や貴族から一般庶民へと移り変わろうとしていた。啓蒙思想家たちはそのような民衆に対して、自身の力で考えて生きることを勧めていった。

啓蒙思想とは、一つの学問体系というよりもむしろ、合理主義に基づき人々を理性の光に目覚めさせようとする、大きな社会変革の動きであったといえる。彼らが教育を重視したのも、それが人々を啓蒙化するのに最も有効な手段であると考えたからである。また、その活動の背後には以下のような共通する考え方があった。

第一に、人間理性は普遍的である。

第二に、すべての人間は同じ自然の一部であり、平等である。

第三に、幸福は人間の権利であると同時に果たされねばならない義務である

第四に、変化と発展への信念

第五に、他の宗教・宗派への寛容

第六に、社会の不正や貧困と戦おうとするキリスト教的ヒューマニズム

II. 百科全書派について

啓蒙思想家たちは、知識の集大成として、それまで各分野で発達してきた学問を一つの事典にまとめるという作業に乗り出した。それは、15世紀末頃から様々な科学、理論がそれぞれに展開され、そういったすべての種の学問を包括した科学が求められていたからでもある。フランスのディドロ（1713～1784）、ダランベール（1717～1783）、ルソー（1712～1778）らその編集員は百科全書派と呼ばれたが、彼らは作品を通して教会の権威を批判し、自由を追求し、国民の政治参加を訴え、法の前に人間は平等であると主張した。このような主張をもつ『百科全書』は絶対王政に抑圧された自由と平等の防壁として中産階級に支持され社会に根づくとともに、啓蒙思想のバイブルとして位置づけられた。それは理性の力に完全な信頼を置く啓蒙思想家らが、この時代の人々を啓蒙化するためのものとして作り上げた、非常に特徴的な作品であろう。作品全体を通じて、人間の未来に対して楽天的であり、自由な理性の力を信頼し、社会問題への意識関心も高く、知識の獲得と進歩に対して大変熱心である、といった姿勢がうかがえる。

4. 教育への関心

教育は啓蒙思想家達の一番の関心事だった。なぜならば、教育を通して人々は理性の力により知識を獲得することができ、「知る事」は自立のための中心的要素であると捉えたからである。彼らは教育の枠を全民衆に広げることを主張した。そうした啓蒙思想家らの意見を取り入れた各国の啓蒙専制君主たちは、新しい教育体制を作り、全民衆に教育を受けさせようと努めた。

当時のヨーロッパでは特にイエズス会の教育への影響が強かったが、修道士たちの思想は合理主義のそれと対立したため、各国の啓蒙思想家達はイエズス会士達を自分たちの望む改革への妨げであるとみなし、国外に追放するよう働きかけた。このことがイエズス会という組織そのものの一時解体の一因になったことは否めない。

5 . 宗教の分裂

ヨーロッパにおいて、古くからカトリック教会が大きな影響力を有していたのは言うまでもないが、それは各国の教会が教皇を頂点とするヒエラルキーによって一つに統制されながら政治とも密接なつながりをもっていたからである。各地の教会は十分の一税を得る事によって経済的地位を確保しながら、王から教会を維持する為の援助を受け取った。その代わりに王は自分の政治に有利なように司教を任命するための権利をもっていた。したがって、これまで何度か述べてきているように、両者は相互依存の状態にあった。

しかし、16世紀はじめのルターによる宗教改革、英国国教会の成立などカトリックからの分離運動が各地で頻繁に起こり、カトリックによる統一体制は徐々に崩れていった。それぞれの国での宗派同士の争いが起こる事を懸念する王は、もはやカトリックだけに援助を与えるわけにいかなくなり、カトリック教会と政治の癒着も徐々に薄れていったのである。こうして、ヨーロッパではすでに18世紀には教会の影響力は弱まっており、それぞれの国が独自の政治体制を確立するようになっていった。

6 . イギリス議会の形成

18世紀の思想的趨勢の影響を受けた具体例として、イギリスの議会形成について取り上げたいと思う。

イギリスの議会の形成には以下三つの要因があげられる。

第一に、北米のイギリス植民地で政治に対する新たな発想が芽生えた事である。以前の政治概念においては、王が神と人をつなぐ唯一の架け橋の役割を担っていたが、この統治権を王に与えるのは神ではなく、人民なのではないかと考えられるようになった。その影響もあり、イギリス本国ではヨーロッパの他の国と異なり、王が絶対的な権力を有するとは考えられなくなったのである。

第二に名誉革命に至る一連の出来事である。17世紀イギリスは制海権を

握ったが、国内的には大きな問題を抱えていた。ジェームズ1世（1603～25）のとき、経済危機が起こり、貧困が激増し、それが政治・社会的危機を誘発する結果となった。それ以前からトマス・モア（1478～1535）などによってイギリスの政治批判は行われていたが、このころになると社会の構造改革を求める気運はますます高まり、チャールズ1世（1625～49）の時代における、清教徒革命の結果、王は処刑され、一時君主制の崩壊をみた。しかし、チャールズ2世は王政復古で即位を遂げた後、旧教復活を図るなどして、新たに議会との対立に火がつく。ジェームズ2世（1685～88）は議会と権力闘争が続く中、絶対的権力を取り戻そうとするが、名誉革命によってフランスに亡命する。結果、1688年オランダから招かれたウィリアム3世が権利の章典を発行し、これによってイギリスの政治は、王と貴族からなる上院、そして新たに政治的発言権を与えられた中産階級や一部の自由農民からなる下院とのバランスの上に成り立つようになる。

第三の要因として、ジョン・ロック（1632～1704）やヒューム（1711～1776）らの思想的影響である。新しい政治方法を模索していたイギリスは、彼らのおかげで比較的平和裏にその道が見出せたといっても過言ではない。とくにロックは政治家としても有名で、政治哲学では第一人者であった。彼は政治の面での自由主義を確立した一人に数えられ、フランスの啓蒙思想に直接的に影響を及ぼした。絶対王政を弁護する姿勢を崩さなかったホブズ（1588～1679）に対し、ロックは議会君主制こそが政治システムとしてもっともあるべき形で、政治の主権は国民にあるとした。彼は原始的な国家体制を想定するとき、人間はもともと自由平等であり、いかなる支配関係も存在しないものと考えた。そこには人間すべてを支配する自然法が存在し、各人が自らの幸福を追求しながら、その法に基づいて他人の権利も犯さないという原則が成り立っていた。これは、人間は生まれながらにして善い存在であるという、いわゆる性善説が前提となっており、啓蒙思想も一般的に同様の考え方を根本に有している。それでは何故現実には支配関係が生まれるのかといえば、それはルソーの社会契約説と同様に、国民は政治を行う人々に対し、その権利が法によって保障されるよう、支配権を委託しているのだと考えた。

結果的にイギリスは平和の時代を迎え、議会でウィッグ、トーリーという二大政党が誕生した。王は“ 君臨すれども、統治せず ” という言葉通りの状態に至ったのであった。

V . スペインの啓蒙思想

ここまで18世紀ヨーロッパの有り様と啓蒙思想について見てきた。この章では、スペインという国に焦点を当て、その独自性と、啓蒙思想がどのようなものであったのかを考えたい。

1 . スペインの特異性

このころのスペインについて語る前に、スペインの特異性について押さえておかなければならない。スペインはヨーロッパの一部でありながら、他のヨーロッパ諸国と異なる点が多い。そしてそれが、スペインの社会的・思想的展開に大きな影響を及ぼすことになる。

地方色の強いスペインは一つの国として統制されにくく、内なる葛藤が常に存在した。しかし、この国も18世紀になると他の国と同様に、社会変化・社会改革を模索していた。帝国崩壊後の経済状況の悪化を批判的なまなざしで見つめながら、他のヨーロッパ諸国同様の繁栄を求め、特にイギリスやフランスをモデルに改革を行おうとする。この姿勢はそのままラテンアメリカへと伝わり、ラテンアメリカもイギリス・フランスを目指すようになる。

2 . 18世紀のスペイン

18世紀、スペインはどのような状況にあったのだろうか。

1700年のハプスブルグ家最後のスペイン王カルロス2世が死後に、血縁関係にあったルイ14世の孫のフィリップがフェリペ5世として王位に就くと、フランスとスペインの合併を恐れたイギリス・オーストリア・オランダがスペイン継承戦争を起こす(1701~13)。その結果ユトレヒト条約が結ばれ、フランス・スペイン両国が合併しないことを条件にブルボン家の

王位継承が認められたが、スペインはジブラルタル、ミノルカ島をイギリスに奪われ、1714年のラシュタット和約により、オーストリアにネーデルランドも奪われた。これら条約によって国土が縮小した王国は急激に衰退してゆき、国内の経済・社会の状態も悪化したのである。そしてカルロス3世の時代（1759～1788）には、イギリスの拡大主義に抵抗しなければならなかった。

ブルボン王朝のカルロスはフェリペ5世の息子で、イタリアのナポリとシチリアの統治を任されていたが、異母兄弟であったフェルナンド6世の亡き後、カルロス3世として王位を継承した。

王はヨーロッパにおける啓蒙専制君主の一人として、様々な改革を行った。主な内容としては行政改革、経済の自由化、教育改革、教会や貴族の権力の制限などだが、それらは余り成功しなかった。

スペインにおいて諸改革が大きな成功を収められなかった最大の要因は、改革を望みつつも、現存の封建制を打破しようとは考えていなかったことにあるといえる。スペインは先にも述べた通り、地方性が強く、それぞれが他国と独自に同盟を結ぶほどであったため、王はそれぞれの地方からこの自治権を取り戻し、中央集権化を進めようとした。そのために王は中央政府に直属する役人を各地に派遣したが、これもあまりうまくはいかなかった。農業においても、当時人口が増え労働力が増加したにも関わらず、技術的な進歩がなかったため、余剰生産物が生まれず、そのため商人も育たなかった。商業の自由化もある程度までは進められたが、ギルド制など旧制度の残存が妨げとなり、発展の範囲は限られたもので、特に地方には浸透していかなかった。土地の借り手が増えたために結果的に得をしたのは、地主であった貴族・聖職者階級だった。また税制に関しても、土地台帳などを作って改革を試みたが、貴族や聖職者は税を払わなくてもよい特権を有したままだった。教育改革についても、カルロス3世は、啓蒙思想家たちを積極的に登用し、実験科学や近代哲学の思想を他国から取り入れながらも、自国の体制を変革するには至らず、成功には結びつかなかった。

一方このころ、植民地は経済的にどんどん成長し、人口も増えていった。イギリスやフランスとも交易を始めたが、スペインによって貿易は統制され、直接取引を行うことはできなかった。

3 . スペインの啓蒙思想

では上記のようなスペインにおいての啓蒙思想とはどのようなものだったのだろうか。

何よりもまず、批判主義と文化の世俗化という点を押さえておかなければならない。スペインは特に保守的なカトリックであったことを考えると、後者の変化は重要である。事実、このころから反宗教的傾向が強まり、そのおかげでスペインにも変化と進歩の兆しが見えてきた。合理主義の精神が芽生え、ようやく自然を科学的な視点から観察しようとする姿勢が生まれる。これは、17世紀後半に強まった異端審問所の厳しい弾圧の反動的傾向ともとることができる。しかしそのような自由主義的な兆しが生まれながら、スペインではそれと真っ向から対立する保守主義の流れも存在しており、両者は妥協することなく対立を続けた。

結果的に言って、スペインの啓蒙思想は他のヨーロッパ諸国ほど大きな成長を見せなかったといえる。フランスなどにおいては、啓蒙思想の担い手は中産階級であった。しかし、18世紀になっても封建制を維持していたスペインでは、フランスほど大きな社会変化はなく、中産階級が社会的に台頭することがなかった。カルロス3世の改革下でも特権階級に大きな変化は見られなかった。このような伝統的社会制度の温存は啓蒙思想の発展にとって、少なからず足かせとなったことであろう。わずかながらでも啓蒙思想を前進させようとしたのは、貴族の中でも下層の、少数派の人々であった。また、1808年、ナポレオンに対する戦争が起こったが、このときスペイン国内ですべてのフランス的な要素への反発が生じ、国民の革命への意思がそがれてしまったことも、原因の一つである。

しかし、それでも啓蒙思想家達の尽力によって、文化面の世俗化が進み、

古くからのカトリック中心主義は少しずつ崩壊を始めた。それまでスペインでは教会の教義である啓示、神学、スコラ哲学の三要素が教育、政治、経済まで広く思想的影響を及ぼしていた。しかし、近代科学の父と呼ばれたデカルトや英国経験主義哲学者のベーコンがスコラ哲学を批判したように、スペインの思想家達もそれらの伝統的価値観を打破しようとしたのであった。

文化の世俗化が最初に現れたのは文学であった。テーマとしては主に政治・経済・社会問題が取り扱われ、エッセイなど比較的自由的な文体で書かれたものが多かった。また思想的に保守主義を保っていた大学に対して進歩的な研究を行ったのが、当時現れたアカデミアという機関であった。これは、言語や経済、芸術などあらゆる分野に置かれ、新たな文化の媒体としての役割を果たした。また、啓蒙思想を広く大衆に伝えるため、演劇も用いられた。文盲の人が多い中、風刺に富んだ喜劇などを通して、大衆の教育を試みた。また、新聞や雑誌などのジャーナリズムも徐々に普及していき、情報の媒体として重要な位置を占めるようになった。

具体的に啓蒙思想家と呼ばれる人々は、百科事典ほどの知識を備えた知識人や旅行家たちだった。次の4人は特に著名な人物である。

1) ベニート・ヘロニモ・フェイホー (1676 ~ 1764)

ベネディクト会修道士。「新しきを知る」ことを勧めた。理性や自然科学は信仰や哲学から独立しており、自由であると主張。50歳から執筆活動を始めたが、文体も古くからのものを取り払ってエッセーなどの形式をとり、表現する事は難しくないと説いた。彼の一般庶民を対象とする作品は、スペインの大衆文化の発展に貢献したと言える。しかし一方で、最高の科学は宗教に対してある程度妥協性のあるものと説き、教会の教義に反する作品は出さなかった。

・主な作品「Teatro Critico Universal」

* 演劇用の作品で八巻に及んだ。

「Cartas Eruditas」

2) ペドロ・ロドリゲス・カンボマーネス (1723 ~ 1802)

セビリヤで学んだ後、弁護士として13年間働く。後に財務省に勤め、政治においても大きな役割を果たす事になる。スペイン王立言語アカデミーと歴史アカデミーの会員で、スペインに対する幅広い知識を備えていた。一方で政治にも大いに精通していた人物で、知識を文化や政治の中に上手く取り入れ、民衆をそれに参加させた。自由経済を主張し、地方性の強いスペインにおいて市場統合を行い、国内経済の成長を目指した。

・主な作品「Tratado de la Regalía de Amortización」

「Discurso sobre el Fomento de la Industria Popular」

「Discurso sobre la Educación Popular de los Artesanos」

3) フランシスコ・カバルース (1752 ~ 1810)

フランスで商人の息子として生まれる。18才のときスペインに赴いて後、生涯そこで暮らす。石鹸工場を作るなどして財を築き貴族となる。マドリードで啓蒙思想に触れ、政治に関与し始める。ホベリャーノス(後述)と友人だったが、1810年にフランス軍が侵入した祭、スペインに改革がもたらされるようにとフランス軍の味方をしたために、友情はもろくも崩れ去った。

カバルースにとって自然とは理性を導くものであり、人間理性を伝統から解放して自由にする事が教育の目的だと主張した。その背後にあるのは自然崇拜の姿勢であり、人間は生まれながらにして善人であるというユートピア思想であった。よって、同様に政治や経済からも伝統の枠を取り払い自然状態に戻す事が必要だとした。また、将来の市民を育てるために政治教育の必要性を説いたが、それも閉鎖的な大学の体制を批判しながら、自由な形で行われる教育方法を前提とした。

・主な作品(経済関連のものが多い)

「Memoria Relativa al Comercio de India」

「Memoria para la Formación de un Banco Nacional」

「Memoria para la extinción de la Deuda Nacional
y el arreglo de contribuciones」

「Sobre la unión del comercio de América con el de Asia」

「Cartas sobre Obstáculos que la Naturaleza y la Opinión
y las Leyes Oponen a la Felicidad Pública」

* 若者達にささげられた作品。

4) ガスパール・メルチョール・ホペリャーノス (1744 ~ 1811)

マドリードで神学と哲学を学ぶ。カルロス3世の治世でもっとも重要な人物であり、歴史や教育に非常に興味を持っていた。教育は組織化、システム化されたカリキュラムによって実用的、実践的であるべきと説き、繁栄や幸福を得るために必要な獲得手段と捉えた。カルロス3世と改革への意見を同じくし、自然は人を幸せにするものの起源であるから、自然の状態を観察し明らかにすべきだと説いた。また、カルロス3世を賛美する作品を執筆する。

・主な作品「Elogio de Carlos III」

おわりに

独立するということは、一体何をさすのだろうか。例えば私達が個人として独立するということを考えるとき、何を条件にそれを判断するだろうか。経済的な自立だろうか、それとも精神的に強くなることだろうか。あるいは誰かの支えになれるようになったときだろうか。

国の独立、ということを考えるときにも、基本的には同じような問いが存在するのではないか。18世紀のヨーロッパは、まさに人間で言えばちょうど子供と大人との変わり目の、思春期のようなものに思われる。それまで超越的な親という存在により、物事の善悪が規定され、判断の基準であったのが、自我に目覚め、“私は私である”ということに気づく。自分自身で考え判断し行動するようになる。18世紀のヨーロッパは、まさにそのような段階にあったのではないか。それまで神という存在に規定されてい

た世界に対して疑問を持ち、自分自信を信頼するようになっていったことを、人間の成長段階とからめて考えてみると、よく理解できるように思われる。啓蒙思想家らの活動は、思春期の子供がそうするように、社会に対して批判的な態度を持ち合わせていた。

18世紀という時代、ヨーロッパでは科学の発展、生活環境の改善に伴う人口増加、市場の拡大に伴う経済の成長が遂げられ、社会内部はめざましく変化した。また、啓蒙思想家達の尽力によって人々が理性へと導かれ、結果としてそれまでの宗教観、さらには伝統的な社会制度を覆すような大きな流れが生まれた。そして、ヨーロッパとの交易が活発化するに従って、植民地も徐々に経済的に発展を遂げ、啓蒙思想の波及によって、自由と独立への目が啓かれていったのである。そのようなラテンアメリカの自立を促した土台は、まさにこの18世紀のヨーロッパにあったといえるだろう。

参考文献

- Abellán, J., *Historia del Pensamiento Español*. Espasa, Madrid, 1996.
- Bennanssar, B. y otros, *Historia Moderna*. Akal, Madrid, 1980.
- Caso González, J. y otros, *La Ilustración Española*. Cuadernos Historia 16, n. 44, Madrid, 1985.
- Fernández Díaz, R. y otros, *España en el siglo XVIII*. Crítica, Barcelona, 1985.
- Fernández Díaz, R. y otros, *Manual de Historia de España*. Historia 16, Madrid, 1993.
- Ferrandis Torres, M., *Historia de la Cultura Universal*, tomo II. Estades, Madrid, 1956.
- Im Hof, U., *La Historia de la Ilustración*. Ed. Crítica, Barcelona, 1983.
- Mestre, A., *Despotismo e Ilustración en España*, Ariel. Barcelona, 1976.
- Soboul, A., y otros, *El siglo de las luces*, tomo I., Akal, Madrid, 1992.